

## 障害史関連の博物館、史料館、美術館等の紹介：欧米地域を中心として

クウィーラ, ダーヴィト= ドミニク  
九州大学

<https://doi.org/10.15017/4377794>

---

出版情報：障害史研究. 2, pp.111-126, 2021-03-25. Faculty of Social and Cultural Studies,  
Kyushu University

バージョン：

権利関係：

# 障害史関連の博物館、史料館、美術館等の紹介

— 欧米地域を中心として —

An overview of Museums, Archives, and Art Collections  
related to Disability History,  
focusing on collections in the United States and Europe

クウィーラ, ダーヴィト = ドミニク

David Dominik CHWILA M.A.

(九州大学)

(Kyushu University)

## 要 旨

本稿の目的は、(現時点では主として欧米圏に見出すことができる)博物館や美術館における〈障害(者)〉の歴史を主題とした展示活動、さらに障害史関連の史料コレクションの現状についての概観を提供することにある。

## ABSTRACT

The main purpose of this paper is to provide an overview of museums and collections (mainly situated in Western countries) with either a particular focus on the history of disability and the people regarded as 'disabled', or which, to some significant extent, include *Disability History*-related artifacts and source materials in their displays and/or collections.

### はじめに：障害史系の博物館や〈障害〉・〈障害者〉の展示場への出展の現状について

日本においては、障害史系の博物館や展示会が皆無に等しい状況であるのに対して、欧米では、その数はまだ少ないものの、日本に比べて米国及びヨーロッパ各地の博物館等で、特別展示から常設展示まで、〈障害者〉の歴史や現在の実態、または科学や美術など様々な分野による〈障害〉という現象の捉え方を中心とした展示が公開されている点で著しく進んでいる様子を見ることができる。世界各国の博物館における展示活動の現状を見てみれば、近年、〈障害〉と〈障害者〉が展示テーマとして取り上げられることが増えてきたが、まだまだ少ないのが実状である。

世界中のあらゆるタイプの博物館が開催する展示コンセプトにおいて、主として世界各地ごとに異なる文化を平易な例に、人間存在の多様性に対する世間一般の人びとの意識を向上させることにも力を注ぐようになってきたが、人間全体の多様性を展示の対象とするには、展示内容は未だ視野が狭く、展示品の選択も恣意的なので、特に〈障害〉というテーマになると、これまでの進展は不十分と言わざるを得ないと、イギリスの「レスター大学博物館学研究所」(University of Leicester Research Center for Museums)の所長、Richard Sandell氏をはじめ、博物館学、あるいは障害学や障害史を専門とした一部の研究者の間から批判の声が上がってきている。人間の多様性の不可欠な一面ではあるものの、〈障害〉という現象が博物館の展示対象として位置づけられることは殆

んどなく、歴史的にも現状においても〈障害者〉として生きる人びとの存在が多分に無視され、展示上に否定されているかのような状況 (“one area that has been especially neglected is the representation of disabled peoples’ lives”; Sandell/Delin/Dodd/Gay 2005: 5) をみるに、もう一段広い視野から、〈障害者〉をも含む、より多角的なアプローチが必要とされている。また、人類の文化的多様性の他に、博物館による史料コレクションのさらなる拡充及び展示活動の面には、主に女性や少数民族集団に焦点を当てながら、それぞれの国内社会において歴史的に社会から排除され、周辺化されてきた一部の社会的弱者やマイノリティグループの人びとを対象として取り上げる傾向が強くなってきたことが確認できるが (Sandell/Dodd/Garland-Thomson 2010: xix)、それに対して〈障害〉というのは、博物館の展示・公開の場では殆んど見ることができなく、博物館での稀な事例からすれば、展示で取り上げることがあったとしてもその展示の仕方がどうにも不相当としか思えない場合が多々あり、総じてみれば、世界中の博物館では〈障害者〉について学べる機会が乏しい状況 (“under-representation of disabled people within museum displays”; Sandell 2007: 9、または “under- and mis-representation of disabled people within museum narratives”; Sandell/Dodd/Garland-Thomson 2010: xix) が続いている。

博物館が社会に対してどのような役割を果たすべきかについて考察すると、その主要な社会的役割のひとつは、展示活動を通じて、あまねく人びとが知識を得る場を提供することで、世の中に以前存在した、あるいは現存する人間界や自然界の諸存在や諸事物、諸事象や諸現象の多様性を理解するには、社会共通の認識の形成に寄与し、理解を向上させることにある (“the social agency of museums in shaping understandings of difference”) (Sandell/Dott 2010: 11) とみなされている。

いかなる理由から〈障害〉のある人びとが博物館における展示にて対象として取り上げられることはこれまでも少ないのか、それは関連史料や展示できる所蔵品の欠如・残存状況の貧弱さという点に起因

するか否か (“whether the absence of disabled people in museum narratives was explained by a corresponding paucity of disability-related material culture within existing collections or whether other factors were at play”; Sandell/Dott 2010: 11) といった問題の解明を目指して、2003年に「レスター大学博物館学研究所」によって調査が行われた。英国全国の博物館を対象に、〈障害〉と〈障害者〉に関係する史料の有無を調べるためのアンケート調査の結果として、驚いたことに、それぞれの博物館が保有するコレクションの大半において、〈障害者〉の史実を伝える史料が少なからず残されていることが明確になった。それらの所蔵史料からは、過去の時代の〈障害者〉たちの内、弱者と思われる者も勿論存在していたが、近現代に主流となっていった〈障害者〉を常に介護や支援を要する日常生活の不自由な受動的な存在としてのみ一面的に捉らえる見方とは違って、つまり、弱さのステレオタイプに反して、彼らが〈障害〉の無い人びと同様に能動的な主体として社会生活に参加し、積極的に多様な社会的あるいは職業的活動に取り組んでいたこともあまり珍しくなかったことなどがうかがえる (詳しくは Sandell/Dott 2010: 11-12; Sandell 2007: 148-159)。文献史料や絵画史料等、美術や民芸の作品から日常用品にかけて展示の実施に必要な物品、〈障害〉に関わるあらゆる形態の史料が数多く所蔵されている実態 (“richness of [disability-related] material within collections”) が認められる一方、それらの所蔵品は展示にて世間一般に公開されることが実に少ない現状 (“rarely reflected in museums’ public programmes”) も明らかになった (Sandell/Dott 2010: 12)。なぜ展示されていないのかをかける博物館に尋ねた結果、〈障害〉というテーマを展示で取り上げることに對して博物館側には、〈障害〉のある人びとの拒否反応を招く恐れ (“a fear of causing offence to disabled people”; Sandell/Dott 2010: 12) が強く、彼らの感情を害するような状況を予防するためであるという理由が最も多く挙げられた。もう一つの理由として、博物館を支える多くの学芸員の間では、それらの所蔵品が、展示されることによって、社会に内在する〈障害者〉にまつわるステレオタイプを克服する課題、さらに社会一般の〈障害者〉に対する認識の改

善に寄与できるものとして持つ重要性や意義について認識が浅いこと (“*a lack of consensus about the significance and importance of these issues*”; Sandell 2007: 159) も確認できた。過去と現在社会における〈障害〉への見方や捉え方を根本から問い直す可能性を持つと思われる点から、博物館の所蔵コレクションに残存してきた再発見を待っている「Hidden History of Disability」(「〈障害〉の隠された歴史」)を探究し、研究成果を博物館の展示などを通して社会に発表することは、博物館学ないし *Dis/ability History* 研究の今後の重大な課題の一つとされている(詳細は Sandell/Delin/Dodd/Gay 2005; Sandell 2007: 138-172 を参照)。

上述のような状況にありながらも、それぞれに異なる観点から、多様な形で〈障害〉や〈障害者〉を主体とした博物館の数が主として欧米の国々において徐々に増えてきている傾向が見られるため、以下には、〈障害〉を有する人びとの歴史や現実について学ぶことができる、もしくは様々な地域や時代からの〈障害(者)〉に関係する各種展示品が常設展示の主な構成要素の一つとして出展されていると認められる博物館、障害史研究に有用と考えられる史料を比較的数多く所蔵する史料館や美術館を、紹介したい。それにあたり、収蔵する機関・施設やコレクションの性格を考慮して、適宜分類し、最後に参考として、紹介内容の一覧表(大要一覧表)を付した。

なお、ここでの障害史系の博物館等の紹介は欧米を中心にしたものであり、西洋中心主義的な偏りがあると批判もあろう。つまり、欧米以外の世界、具体的には、イスラム圏の国々、インドや中国などアジア各地、他の地域の博物館等における〈障害〉に関わる展示活動の有無、その内容や実施形態、あるいは関連史料のコレクション内での有無について、言語の障壁もあって確認し難く、掲載にいたっていない。また、紹介文はインターネット情報に基づくことも断っておく。

これらの点は、文献や実地などの調査の可能性も含め課題としたいが、もとよりこの紹介文が今後の障害史研究の一助になることを願う。

## I) 障害史を専門とした歴史博物館

- 「**Disability History Museum (障害史博物館)**」  
【アメリカ合衆国マサチューセッツ州フランクリン郡コンウェイ町】(<https://www.disabilitymuseum.org/>)

「障害史博物館」は、歴史の流れとともに移り変わっていった文化的価値観やカテゴリー別の社会的属性の概念、またはある時代の法制と政策などが、〈障害〉という現象の捉え方、〈障害者〉ら自身と彼らの家族や地縁等のコミュニティ、広く周囲の人びとの日常生活の有り様にどのような影響を及ぼしていたのかという問題、人間存在の多様性や異質性についての人びとの理解をさらに深めること (“*to foster a deeper understanding about how changing cultural values, notions of identity, laws and policies have shaped and influenced the experience of people with disabilities, their families and their communities over time[,] [...] deepen [the visitors'] understanding of human variation and difference*”) を目的としている。常設展示では、米国における一九世紀からの〈障害者〉保護・養護施設及び〈障害児〉保育・教育の発展史、二〇世紀の障害者権利運動に焦点が当てられている。

約三千点を数える史料コレクションの大部分は、主に1800年以降の米国関連のあらゆる文献史料や絵画史料で、公文書の他に特に生活関連の史料が多く、〈障害者〉たちの実生活・生活実態を示す写真、個人の運命を語る手紙や絵葉書、または啓蒙パンフレットや啓蒙雑誌などが中心となっており、その大体がデジタル化されてきたため、オンラインでの検索や一部の史料の閲覧が可能である。

- 「**Museum of disABILITY History (障害史博物館)**」  
【アメリカ合衆国ニューヨーク州バッファロー市】(<https://www.museumofdisability.org/>)

米国で最初の〈障害者〉の歴史を専門とする博物館である。本博物館は、米国における最大のマイノリティーとなる障害を有する人びとがアメリカ合衆国の歴史を通じて、社会的にどのように扱われてき

たのか、社会生活においていかなる困難に直面し、それらを乗り越えてきたのか、または二〇世紀の50年代後半・60年代から展開されてきた「公民権運動 (Civil Rights Movement)」や「障害者権利運動 (Disability Rights Movement)」、あるいは1970年代から始まった「障害者自立生活運動 (Independent Living Movement)」など社会情勢の変化を背景に、障害者施策の時代・時期ごとの傾向や変遷に焦点を当てながら、国民全員の民主主義の歴史的視座に立脚した社会的平等性を求める観点から、〈障害〉の有る人と無い人との間の相互理解を醸成させることによって、人権や福祉、日常生活など現在の米国社会の抱える障害者にまつわる諸問題の解決に寄与する目的で2003年に設立された。

常設展示では、近現代の米国が主たる内容となっているものの、〈障害〉という現象をなるべく広い視野から解明するアプローチがみられ、「Throughout History」を題材とした常設展示の導入部分において、〈障害〉の人類史上の意義について「人が居る限り、障害を有する者も、もちろん居た (*As long as there have been people, there have been people with disabilities.*)」とあり、欧州の中世や近世を含めた障害者の歴史の全体像が挙げられている。常設展示は次の六つのセクションに分かれている。「メディア館 (Media Wing)」では、前近代に遡って各種メディア作品における〈障害者〉の描かれ方が大衆社会に流布する〈障害〉認識や〈障害〉観、〈障害者像〉の形成にどのような影響を与えたのかという点に主眼が置かれている。「医療館 (Medicine Wing)」は、各時代における先天的や後天的に障害が生じることを防止するための様々な手段、呪術治療など信仰的療法を含めた近代医学以前の欧州での医術・医療文化について学ぶことができ、全体的なテーマとしては、不合理かつ迷信的な解釈に留まっていた前近代の障害(者)観から、身体観や病因説の世俗化、病理学をはじめ医学的知識の進歩に伴った奇形や障害を自然科学的に捉える理解への発展、障害者の存在を医療的な問題として把握する障害のある人びとを支える医療制度の確立が紹介されている。「社会館 (Society Wing)」は、米国の歴史を通じて障害者たちが社会

生活の場において直面していた諸問題についての展示であり、それぞれの時代・時期の社会背景などとの関係を見ながら、彼らに対する社会的認識の変遷が示されている。「ニューヨーク州館 (New York Wing)」では、地域史的な視点から、地元のニューヨーク州で暮らしていた障害者らの歴史が語られている。さらに、障害者教育史が対象とされた「教育館 (Education Wing)」、障害者の法的な位置づけ、権利侵害・差別等の問題の歴史的推移と今後の課題が示されている「権利擁護館 (Advocacy Wing)」がある。常設展示の内容を見てみると、障害者向けの福祉施設あるいは教育施設の形成史や発達史、特に近代以降のニューヨーク州の教育制度の中での障害児教育の組織化・体系化、さらに米国における優生学の行方、障害者の日常生活を支援する自助具・福祉用具の開発史や運用史、または大衆娯楽文化における〈障害(者)〉の描かれ方、障害者スポーツの歴史的展開に焦点が当てられている。

・「Langdon Down Museum of Learning Disability (ラングドン・ダウン学習障害博物館)」【イギリスの大ロンドン市リッチモンド・アポン・テムズ区ティントン】(<https://langdondownmuseum.org.uk/>)  
英国の医者ジョン・ラングドン・ダウン氏 (John Langdon Down, 1828年～1896年) によって知的障害、発達障害や学習障害を有する子ども、特にダウン症児、さらに精神疾患を持つ子どもの保育・教育施設(特殊学校付きのケアホーム)として1868年に「Normansfield Hospital (ノーマンズフィールド病院)」という名で開設され、1997年まで障害児療育院として機能を果たしていた後、2012年に障害児の保育や教育に関わる歴史を辿る博物館として公開された。コレクションは、地元の「Normansfield Collection and Archives」だけでなく、ダウン氏が1858年から十年にわたって院長として勤務していた、史上最初の近代的精神医療を目指した精神病者療養施設とみなされている「Royal Earlswood Asylum for Idiots (アールスウッド白痴アサイラム)」の「Royal Earlswood Asylum Collection」も所蔵されている。その大部分は、ダウン氏による院長としての活動に直接関係するもので、長期間在院していた障害者等の生活改善

への功績、彼が目指した知的障害や精神疾患のある子どもに対する新たな保育・教育方法の精神医学、特に障害児教育の発達史における意義を表すものが常設展示の中心となっている。常設展示から、ダウン氏は、現在の精神医学で最も珍重され、広く採用されてきたアートセラピーの先駆者でもあったことが明らかになり、精神面に異常あるいは知能に障害のある人びとに対してあらゆる種類の強制的かつ暴力的な療法が主流であった時代において、押し付けずに患者たちが持っている創造力を引き出して、自由に絵を描くことや物作り、医療スタッフと共に唱歌や楽器の演奏、演劇など芸術療法的なアプローチを通して、発達障害などコミュニケーションが難しい子どもの心の内面を外に放出させ、教育効果を向上させようとした方法が実践されていたという歴史が展示の柱の一つとなっている。もう一方の主眼は、からくり起動の木彫り像や木製の艦船模型などで「アールスウッド・アサイラムの天才 (Genius of Earlswood Asylum)」として名を馳せてきた、15歳の頃より終生入院していたサヴァン症候群患者のジェームス・ヘンリー・ピューレン氏 (James Henry Pullen, 1835年～1916年) を事例に、ダウン氏の教えたように、住環境と教育環境が良ければ、一部の障害者が開花できるあらゆる特別な能力にも焦点が当てられ、ピューレン氏による様々な作品が展示され、障害児教育が生む利益、その必要性に対する人びとの意識をより高める場として意味を持つといえるだろう。同じような意味合いで、他にも幾人かの患者の伝記、それぞれの病院内での暮らしの様子が簡潔に展示パネルで紹介されている。

## II) 精神医療史・医学史を専門とした歴史博物館

・「**Bedlam Royal Hospital Archives and Museum** (王立ベスレム病院史料館・博物館) 【イギリスの大ロンドン市ブロムリー・ロンドン特別区ベックナム】 附属 **Bethlem Museum of the Mind** (ベスレム・ミュージアム・オブ・マインド) (<https://museumofthemind.org.uk/>)

1377年より、精神の疾患や異常を理由に「気違い・気狂い」(“lunatic”) と称されていた患者を扱い始め

たため、史上最古の精神病院とされている旧「王立ベスレム病院 (Bethlem Royal Hospital) (1330年に設立) が所蔵するコレクションは、精神保健の歴史を語り、精神疾患を煩っている人びとに対する各種施策の歴史的な変遷、精神病患者向けの保療・福祉施設の発展史、精神医学の近代化に主眼が置かれているものの、医学史を展示するだけの博物館ではなく、歴史が疾病者の立場から語られ、精神病患者が作成した美術作品も数多く展示されている。

・「**Mental Health Museum (メンタルヘルス博物館)** 【イギリスのウェスト・ヨークシャー州ウェイクフィールド市】 (<https://www.southwestyorkshire.nhs.uk/mental-health-museum/home/>)

本博物館は、貧困な精神病患者収容の設備として1818年に開院した「ウエストライディング癲狂院 (West Riding Pauper Lunatic Asylum)」という名で開設された旧 Stanley Royd Hospital の建物にあり、その由来を辿ってみると、「狂気」を疾病の一種とみなして「狂人」を治療の対象として捉える必要性、または精神病患者や知的障害者の「人道的な待遇 (humane treatment)」を主張した初代の院長、精神医学の先駆者として高名なウィリアム・チャールズ・エリス氏 (Sir William Charles Ellis, 1780年～1839年) の功績により、精神疾患に対する「道徳・人道療法 (moral therapy)」を基盤とした、欧米における初の近代的な精神病院としての歴史がある。そういった背景から、Mental Health Museum の常設展示は、近現代にわたり、人権アプローチの展開を中心に見た精神科医療の実践史や変遷史を主たるテーマとしている。特に写真を大きな柱としたコレクションは、主に一九世紀と二〇世紀のもので、カルテなど入院患者の医療情報を収集した書籍、医療器具など種々の非文献史料、それらの表す治療の様子その他にも、患者の病院内の日常生活や各種活動を示す史料も数多く残されている。既に大量の史料がデジタル化されているが、閲覧は有料となる (Stanley Royd Hospital Digital Archive: [www.wakefieldasylum.co.uk/](http://www.wakefieldasylum.co.uk/))。

・「**Oregon State Hospital Museum of Mental Health** (オレゴン州立病院附属メンタルヘルス博

博物館)】【アメリカ合衆国オレゴン州セイラム市】  
(<https://oshmuseum.org/>)

コレクションは十九世紀以降の米国国内の約四千点以上の作品を収蔵しているが、規模の小さい博物館であるため、展示されているものが少なく、その大部分が史料館に所蔵されているのみである。常設展示の内容は、近現代の米国、主として旧オレゴン州立精神病院 (Oregon State Insane Asylum) における精神疾患の治療の歴史についてであり、入院患者の日常生活を表す写真、さらにロボトミーや電撃療法など過去の精神疾患の非人間的な取り扱い、強制的な治療法を示す精神科で使用されていた様々な医療器具が展示され、実際の患者の物語に焦点が当てられ、それ以外に医療スタッフの日常業務の負担についても学ぶことができ、地元の病院を例に挙げて総体的に精神保健施設の発展史、精神医学の発達史が紹介されている。常設展示の特徴としては、ベトナム帰還兵を中心に、戦争後遺症をテーマとした部分もあり、精神科病院に強制入院させられた事例が多かった戦争により精神的外傷を受けた軍人の運命が描かれている。

### Ⅲ) 病理学・奇形学を中心とした解剖標本博物館

・「**Museum Vrolik** (アムステルダム大学学術医学センター附属フロリク博物館)】【オランダ王国北ホラント州アムステルダム市東南区】(<https://www.amc.nl/web/museum-vrolik.htm>)

本博物館は奇形学を中心とした解剖標本博物館となり、一万体以上もの展示品を有する世界最大の奇形児や異形の者、身体の形態異常の標本コレクションを所蔵し、生まれつきあるいは傷病などで後天的に欠損や変形した人体のあらゆる部分、器官が数多く展示されている。その特徴としては、近世の人体病理標本が比較的多いことが挙げられる。博物館の名前は一八世紀後半から一九世紀の中期にかけて活躍した解剖学者のヘラルドゥス・フロリク (Gerard Vrolik, 1775年～1859年) とその息子のウィレム (Willem Vrolik, 1801年～1863年) に由来し、先天性奇形、後天的に変形のある死体を研究材料とする目的をもって、自費でフロリク親子によって生涯にわ

たり収集されてきたコレクションから始まったことを示している。欧州では、特に一八世紀から一九世紀の間、独自の学問として奇形学が盛んになったことが背景にある。1869年に彼らのコレクションがアムステルダム大学に寄贈されて以来、基本コレクションがさらに拡大され、現時点では、フロリク親子を含む、アンドレーアス・ボン (Andreas Bonn, 1738年～1817年) など全八名の医学史上の著名な解剖学者の収集活動によるものであり、1984年に博物館として公開された。収蔵品の内、人体解剖系の博物館において多く展示されている結合双生児の他に、現在、出生前医学のおかげで非常に珍しい様子とされている四肢欠損症、無脳症、無頭症、単眼症などの胎児や乳幼児の奇形・形成不全を示す標本も常設展示されている。人間が中心となっているものの、展示品は、人体だけでなく、世界各種の動物も含め、広く奇形や異形の生き物のホルマリン漬けの死体全体、身体の部位や臓器、頭骨や骨格などの標本が多数展示されており、奇形や形成不全、形態異常等の多様性について学ぶことができる。全体的な展示コンセプトとしては、近世以降の生命観の世俗化、科学的世界観の浸透に伴った欧州における一八世紀の末に至るまで主流であった古来の宗教的自然哲学の時代から近代的な実証的自然科学の時代への移行期を迎えることができる。

・「**Grodno Medical State University Museum of Malformations of the Human Body** (フロドナ州立医科大学附属奇形学博物館)】【ベラルーシ共和国フロドナ州フロドナ市】(<https://www.atlasobscura.com/places/museum-of-malformations-of-the-human-body>)

小さな博物館ではあるが、本博物館の占有している建物の地下室は、医学史的に重大な意味を持ち、1586年に、ポーランドのステファン・バトリュイ国王 (Stefan Batory, 1533年～1586年) の死因を探るために、東欧で最初の人体解剖が行われた場所であることが史料上にも明記されている。コレクションは、一九世紀から二〇世紀を通して収集してきた約百体のホルマリン漬けの先天的もしくは後天的に生じた各種の奇形や形態異常などの人体や身体部位、人間

の病変した臓器を収蔵しており、展示品の特徴は、その大部分が多量飲酒や喫煙、肥満など主として生活習慣病によって引き起こされた身体の奇形や病的な変形に焦点が当てられている。常設展示は二つのセクションに分かれており、一つは不健康な日常生活習慣が原因で、大人の体に発生してきた多様な異常や病変、もう一つは数多くの奇形児や障害児の液浸標本を例に挙げて、胎児や乳幼児の先天性奇形・形成不全、あるいは重度の障害を持つ子、妊婦の誤った生活習慣、妊娠中の母親が胎児に与えた害悪な影響についてである。そういった展示内容の紹介によって本博物館が果たす主な役割として、国民の間の健康的な生活習慣の重要性についての意識を向上させることが目的とされている。

・「**“Wax Museum”, Moulage Collection of the Andreas Syngros Hospital of Venereal & Dermatological Diseases** (「蠟博物館」、アンドレアス・シングロス性感染症内科・皮膚科病院 附属 身体の病変部蠟模型・ムラージュコレクション)」【ギリシャ共和国アッティカ地方中央アテネ県アテネ市】([https://www.moulagen.de/fileadmin/user\\_upload/microsites/ohne\\_AZ/m\\_cc01/moulagen/Website\\_Athen\\_Questionnaire\\_27.10.09.pdf](https://www.moulagen.de/fileadmin/user_upload/microsites/ohne_AZ/m_cc01/moulagen/Website_Athen_Questionnaire_27.10.09.pdf))

ギリシャのアテネにある「蠟博物館」は、1910年に開設されたアンドレアス・シングロス性感染症内科・皮膚科病院の一部で、千六百六十体以上のムラージュを数える世界最大の身体病変部蠟模型コレクションを所蔵している。展示品・収蔵品は主に性感染症や皮膚病によって引き起こされた身体面に現れる症状を示しており、シングロス病院にて治療を受けた患者をモデルに作製されたものである。1912年より1953年に至るまで医学の教育施設として機能していた後、世間一般の性病に関する危機意識をさらに向上させることを目的に、国民教育機関として開館した。常設展示の内容は、性病と皮膚病の病理学的側面に過ぎず、病者の生活実態、疾病の進行に伴った深刻な病変に対する社会的反応などについて学ぶことができない。

#### IV) 精神医療史・医学史を専門とした歴史博物館、さらに病理学・奇形学についても学べる解剖標本博物館

・「**Naturhistorisches Museum Wien: Pathologisch-Anatomisches Bundesmuseum im Narrenturm** (ウィーン自然史博物館 附属 州立病理学・解剖学博物館 旧狂人の塔)」【オーストリア共和国ウィーン市第九区アルザーグルント】(<https://www.nhm-wien.ac.at/narrenturm>)

本博物館が設置された建物、「狂人の塔」(“Narrenturm”)は、1784年にウィーン市内の精神病患者を一定の場所に収容するための保護・養護施設を利用目的とし、ウィーン「総合病院」(Allgemeines Krankenhaus)の一部として開設され、神聖ローマ帝国皇帝のヨーゼフ2世(在位1765年~1790年)が、一七世紀後半から一八世紀にわたって欧州において広く文明の精華とみなされたフランス王国への訪問の際、パリで訪れた精神病患者のみを受け入れた特別の施療院をモデルに、自らの意によって帝都ウィーンの公衆衛生の機構を改革する方針に由来したとされている。社会的弱者に対する慈善事業を行うことを責務として各地での「救貧院」(Spitäler)の設置により、精神病のある人びとも含め、主にキリスト教会があらゆる病人や脆弱者の保護施設を兼ねた中世とは大きく異なり、近世の神聖ローマ帝国の都市社会において、傍から見て精神の異常や疾患を抱えたことの明らかな人びとは、大抵の場合、市民(当時一部の「良民」)としての身分が奪われ、街から追放されたり、あるいは犯罪者らと一緒に刑務所に収監され、公的空間から排除されたことも例外的ではなく、適切な対応とされていた背景に対して、精神病患者をなるべく不可視化しようとする理念に変化は生じなかったものの、それ以前と違って医療や介護の対象者(患者)として認定されるようになってきたため、「世界最初の精神病院」とも呼ばれている。最大139人の入院患者を収容することができたが、一人ひとり別の窓付きの病室の数が限られていたため、市内の精神病患者の全体ではなく、特に他者に「害悪をもたらす」もしくは「嫌悪を引き起こす」危険とみなされた者の社会からの隔離に目標が置か

れた。「狂暴」(Tobende) かつ「不浄」(Unreine) と判断された患者が鎖につながれ、病室に閉じ込められていた一方、初代院長のヨーゼフ・フォン・クヴァリン氏 (Joseph von Quarin, 1733年～1814年) が意図した通り、その施設の特徴としては、他人を侵害するおそれのない患者に対しては病棟内での移動の自由が許され、さらに1795年に院長として赴任した、主著『完全な医事行政の体系』(System einer vollständigen medicinischen Polizey; 全六巻・1779年から1819年の間に刊行された) により「公衆衛生学の父」とも評されているヨハン・ペーター・フランク氏 (Johann Peter Frank, 1745年～1821年) の指導のもとで、病棟の隣に患者が世間の目から守られた環境で散歩を楽しめる高い石垣に囲われた庭園が造園された点が挙げられ、上記は、精神病の捉え方や扱い方、当事者の処遇の問題に対処するにも、考え方が本質的に変わってきた証と解釈されている。患者の病態変化が記載されているカルテから読み取れる通り、精神病を医療が必要な状態とした新しいアプローチの結果として、精神病患者も〈通常の病者〉と同様に医師の手により専門的な治療を受けることが可能となり、治療が数年間に及ぶことが殆んどであっても、病状が好転し、遂に回復したとみなされて退院の許可を得た場合も少なくなかった。また、1852年に完成された中央精神病院「帝国・王国立ブリュンフェルド狂人療養院」(k.u.k. Irren- Heil- und Pflege-Anstalt am Bründlfeld) の設置に伴い、「狂人の塔」は病院としての機能を失い、1869年に完全に閉院となるまで、回復の見込みのない、療養の最も困難な患者のみを受け入れることになった。それから長い間、建物は利用されていなかったが、1920年から「総合病院」で活躍した医師や看護師らの医師官舎・看護師宿舎、さらに病院の備品倉庫として機能していた後、1971年に一般公衆向けの「病理学・解剖学博物館」(Pathologisch-Anatomisches Bundesmuseum) として公開され、2012年にウィーン自然史博物館に付設された。

博物館の所蔵コレクションの由来は、それまで教会の独占物であった学問の世俗化が一段と進んだ一六世紀の後半以来、欧州諸国の大学では、学生や学者

が、それ以前キリスト教上の理由から禁制となっていた死体の解剖を見学できる「解剖学劇場」(Theatrum anatomicum) と称されていた解剖学教室が広まったものの、近世の末期までは、大学で医学を修めた医師たちは、「机上学問医」(Buchärzte) であり、つまり、彼らの医学的知識は大抵の場合、読書のみによって得られた、実用性から乖離したものに過ぎなかったため、実務経験が必要となる病理の診断には知識が浅いということが問題視され、医療教育の実習的な研修面をより強化させる目的で、クヴァリン氏による提案に対して1776年に、様々な病変や異常が認められる各種の人体標本を教材として集めた病理・解剖研究所の「標本館」(Präparate Cabinet) が設立された。コレクションの形成とその管理は解剖学者のアロイス・ルドルフ・フェッター氏 (Aloys Rudolf Vetter, 1765年～1806年) に委任されることになり、人体標本の製作には、主に「狂人の塔」及び近接の「総合病院」で死亡した患者の死体が用いられた。「総合病院」に1784年に開設された、貧困や未婚などにより望まない妊娠をした女性は匿名で出産し、直後に子どもを養子に出すこともできた特別の「出産・捨て子院」(Gebär- und Findelhaus) も附属していたため、収集物の中に、特に奇形児の人体標本が数多く保存されている。また、1811年に皇帝の命令により、オーストリア・ハンガリー帝国領土内で従事する医師に対して、患者身体の体外や体内に生じた尋常でない病変や形態異常などの発見についてウィーンまで報告し、そういった患者が死亡した後、その異常を有する遺体、またはその身体部位を人体標本にし、ウィーンの「標本館」に発送しなければならないという責務が課せられた。収集物は、一八世紀末のものも僅かに残されているが、その大半は一九世紀の間に集められてきたもので、病理学と奇形学に関連したものを中心に、あらゆる奇形や形態異常、広く病的変形を有するホルマリン漬けの死体全体、身体の部位や臓器、頭骨や骨格など五万體以上もの実物の人体標本を所蔵しており、他にも身体の外面に生じる多種多様の病変の過程を学べ、それぞれの様子を直接観察できる蠟模型・ムラージュも多い。奇形や形態異常を有するものを中心に、世界最大の人体標本コレクションとなっている。コレクション

の一部として患者カルテが数多く残されているため、展示物それぞれのもつ背景、当事者のことについても調べることができる特徴がある。

## V) 医療史・医学史、並びに〈障害〉や疾病の生活史、文化史を専門とした歴史博物館

・「**Medicinsk Museion (医学博物館)**」【デンマーク・コペンハーゲン】(<https://www.museion.ku.dk/en/>)  
コペンハーゲンの「医学博物館」は、「全デンマーク医師協会 (Den Almindelige Danske Lægeforening)」の五十周年記念式典に際して1907年に「医学史博物館 (Medicinsk-Historisk Museum)」という名で公開され、2001年に、展示内容の革新とともに、その名前が「医学博物館 (Medicinsk Museion)」に変更された。1918年より現在に至るまでコペンハーゲン大学「健康医療科学部 (Det Sundhedsvidenskabelige Fakultet)」の「公衆衛生学科 (Institut for Folkesundhedsvidenskab)」によって管理されているものの、その開館当初から、医学の教育施設としてのみならず、医学生以上に、デンマーク社会の全ての人びとに向けた健康増進及び疾病予防に関する国民教育を担う機関、衛生啓蒙所としての役割も期待されていた。本博物館が占有している建物はデンマークの医学史において最も意味深い場所であり、1787年から1842年にかけて「王立外科学アカデミー (Det Kongelige Kirurgiske Akademi)」のもとで、コペンハーゲン大学の医学生や若手医師が見学を通して文字だけでない知識を得るために、医学の学習に必要な人体解剖学実習講座が行なわれていた大学の旧「解剖劇場 (*Theatrum anatomicum*)」となっている。常設展示の内容は、史上における医学的認識・理論や医療技術の発展・展開を重点に治療法とそれらの効果などの事柄にのみ着目している狭義の医学史の観点からだけでなく、社会・文化人類学的な見地からもアプローチすることによって、あらゆる疾病の文化的、または社会的側面についても学ぶことができる特徴がある。

約十二万五千点以上の各種類の歴史的 작품을数えるコレクションは、一七世紀からのものも所蔵されているが、展示品・収蔵品の大部分は一八世紀後半

以降のもので、各種の人体病理標本から民間の医療文化、病者の日常生活に関係するものや、疾病/〈障害〉や病者/〈障害者〉のメディア上でのイメージを表すものなど、文献史料と非文献史料の両方とも含んでいる。

〈障害史〉研究者にとって、特に「視覚障害史コレクション (Den Blindehistoriske Samling)」が興味深いものであると考えられる。「視覚障害史コレクション」とは、世界最大の視覚障害者関連の史料コレクションで、盲学校で用いられていた教材、日常生活や仕事などをしやすくするための盲人生活用具が数多く含まれており、その意義については、文化史的、または社会史的観点から、一八〇〇年代以来のデンマークにおける失明者や視力障害者の教育と福祉の形成史・発展史を辿ることができる (“*illustrate[s] the cultural and social-historical development of the care for the blind and the visually impaired in Denmark*”) とされている。「視覚障害史コレクション」が既に全体的にデジタル化されてきたため、オンライン史料館での検索や閲覧が可能 (<https://blind.museion.ku.dk/>) となっている。

「医学博物館」が所有するコレクションのもう一つの柱として、「絵画史料デジタル・コレクション (Medicinsk Museions Billedarkiv)」があり、広く医学や疾病、病者に関連する近世から近現代に至るまでのジャンルの異なる絵画史料が収蔵されているが、オンラインではアクセス不可となっている。

## VI) 衛生思想・衛生学の歴史を中心とした博物館

・「**Deutsches Hygiene-Museum (ドイツ衛生博物館)**」【ドイツ連邦共和国ザクセン州ドレスデン市】(<https://www.dhmd.de/>)

特に「健康確保」や「衛生」の歴史をテーマにした「ドイツ衛生博物館 (Deutsches Hygiene-Museum)」の設立は、1911年に五百万人以上の来場者の関心を集めた「ドレスデン万国衛生博覧会 (Internationale Hygiene Ausstellung Dresden)」が開催された後、世界初の口腔衛生用うがい水「オドール (OdoI)」を発

明した企業家のカール・アウグスト・リングナー氏 (Karl August Lingner, 1861年～1916年) によって構想されたもので、人びとの衛生的な生活の必要性に対する認識を深め、国民の利益や国力を高めるために、広く国民をドイツ帝国の世界強国としての復活を脅かす公衆衛生の問題について啓発する目的で、当時、公衆衛生の水準が優秀と認められたザクセン王国の首都、ドレスデン市において1912年に「国民衛生教育施設 („Volksbildungsstätte für Gesundheitspflege“)」として衛生博物館が公開された。現在の博物館の建物は、1930年の「第二回ドレスデン万国衛生博覧会 (II. Internationale Hygiene Ausstellung Dresden)」のために新たに建てられたものである。

ドイツ衛生博物館の自己紹介によれば、今の時代の主たる任務としては、「身体の歴史、史上の人体についての認識とその取り扱い („Geschichte des Körpers und der historischen Umgangsformen mit dem Körper“)」、特に「歴史の中で人間の身体にまつわる日常的な経験や体験等 („historische Alltagserfahrungen des Körpers“)」を分かりやすく紹介することといった目的が挙げられている。

常設展示は、「人間という冒険 (Abenteuer Mensch)」という題目で、第一展示室は人体の仕組みを中心とした「ガラス製人間 (Gläserner Mensch)」、第二室は「生と死 (Leben und Sterben)」、第三室は、食生活や栄養などをテーマに、「飲食 (Essen und Trinken)」、第四室は、性生活/性風俗及び性病を含め、「性 (Sexualität)」、第五室は「記憶－思考－学習 (Erinnern-Denken-Lernen)」、第六室は「運動・体育 (Bewegung)」、第七室は「美容－皮膚－毛 (Schönheit, Haut und Haar)」について、七つの展示スペースに区分けされており、約六万八千点を数える所蔵コレクションから選ばれた千三百点以上もの収蔵品が展示されている。展示品は、大きく「身体をめぐる知識 (Körperwissen)」と「身体

の管理 (Körperpraktiken)」という二つのグループに分かれており、あらゆる疾病や身心障害の症例を示す蠟模型や実物の人体標本、近代医学の黎明期より開発され、一般の人びとが日常生活で使用していた多種多様の医療器具や衛生器具、例えば義手や義肢など身体的障害のある人びとの日常生活動作の実行を支援する補助器具などが公開されている。常設展示の内容は医学的知識や医療技術の発達史が中心となっているのではなく、各時代に形成された公衆衛生の思想的かつ制度的発展、近世に入ってから徐々に推進されてきた公衆衛生の領域における改善及び人びとの衛生に関する意識の向上を背景に見ながら、社会史・民衆史的な観点から、主に衛生知識や衛生方法の一般の人びととの関係の成り行き、衛生概念の国民生活への影響に焦点が置かれており、政治や経済から日常生活に至るまで、広い視野より健康管理や疾病予防の歴史的変遷について学べる。主たる展示対象は、それぞれの時代が生み出した文化的・社会的背景における人間の身体や健康をめぐる認識、社会や実生活の場面における健康維持・増進に関する意識や行動となり、時代ごとに移り変わる〈健康〉という概念の文化的・社会的構築性、その歴史的相対性を探りながら、人類史上の健康づくり、さらにその啓発・普及を促すための様々な政策などについてである。

また、本博物館はナチス時代の間、当時の人種差別主義的イデオロギーを広報・普及させる役割を担っていたため、ナチス政権下の優生学についての部分もあり、「健全な国体 („gesunder Volkskörper“)」を目指したナチスの「人種衛生学 (Rassenhygiene)」のもとで「厄介もの的存在 („Ballastexistenzen“)」や「生きるに値しない生命 („lebensunwertes Leben“)」として劣等視され、「下等人間 („Untermensch“)」に位置づけられた〈障害者〉らは、極端な「衛生」解釈に基づいた「人種衛生」政策の結果として、「安楽死 („Euthanasie“)」の名目で、老幼に関わらず数万人の知的障害、あるいは精神疾患のある人びとが大量殺害されたというエピソードにも特別焦点が当てられている。

展示活動の他に、本博物館は研究所としても機能している。所蔵コレクションは主にドイツで収集された一九世紀末から二〇世紀の各種の作品を中心にしているが、前近代の収蔵品も数百点保有されており、また、西洋以外の文化圏からの品々も収められている。展示品と同様に、収蔵品の大部分は、それぞれの時代に特有な身体づくりや健康づくりに対する意識、それらの日常生活における実践方法など、広く世間一般の人びとの間での身体観や健康観を表す「日常用品 (Alltagsgegenstände)」であり、さらに、飲食の安全や感染症対策など衛生管理に関する知識を普及するために特に民衆に向けて制作された色々な種類の啓蒙活動資料も数多く所蔵されている。全六万八千点以上の収蔵品の内、約五万点がオンライン目録化され、その一部がデジタル化されてきているため、オンライン史料館での検索や閲覧、ダウンロードが可能 (<https://dhmd.de/emuseum/eMuseumPlus>) となっている。利用者の調査・研究のためであれば、それらの史料を無料で自由に利用できる。また、三万冊の蔵書規模の図書館もある。その重点は、医療政策や衛生行政、民間の養生法や大衆医療文化の歴史、特に「健康啓蒙 (Gesundheitsaufklärung)」に関する文献の収集と提供にある。

## Ⅶ) 障害史関連のコレクションや展示セクションを有する博物館

- ・「**The Science Museum, London** (ロンドン科学博物館)」【イギリスの大ロンドン市、ケンジントン・アンド・チェルシー区、南ケンジントン、エクスピション通り】 (<https://www.sciencemuseum.org.uk/>)

「ロンドン科学博物館」は、比較的所蔵品数の多い義肢コレクションを有し、その一部が「医学に関わる科学と技術の発展 (Science and Technology in Medicine)」という展示スペースにおいて常設展示されており、近世から現在に至るまでの義肢の開発史を辿ることができる。展示品以外の収蔵品をも検索・閲覧できる大英各地の科学博物館のコレクションを繋ぐ総合ネットワーク「Science Museum Group」が所有する約三十二万五千点のデジタルコレクション

(<https://collection.sciencemuseumgroup.org.uk/>) がある。そのコレクションには、特に義手が数多く所蔵されているものの、他にも、広く身体障害や慢性疾患を有する場合、人体機能を代行したり、補助したりするための人工補装具 (プロテーゼ) が少なからず残されている。

- ・「**Schlossmuseum Jagsthausen** (ヤクストハウゼン城博物館)」【ドイツ連邦共和国バーデン＝ヴュルテンベルク州ハイブルン郡ヤクストハウゼン町】 (<https://www.museum.de/museen/schlossmuseum-jagsthausen>)

ヤクストハウゼン城博物館は、ドイツ史上にとっても有名な〈障害者〉、ドイツ国史において騎士の時代を理想化した一九世紀のロマン主義の影響で史上の英雄として崇拝されてきた、右腕に義手を着けたまま戦い続けた騎士「鉄手ゲッツ („Götz mit der eisernen Hand“)」を中心とし、常設展示の最も貴重な展示品として、彼が装着していた鉄製の義手が二体展示されている。1504年に戦傷で右手を失ったゴットフリード・フォン・ベルリヒンゲン騎士 (Gottfried von Berlichingen, 1480年～1562年) は、五本指の開閉が可能な鉄製の義手を通して馬の手綱や剣を握ることができ、〈身体障害者〉でありながらも、欧州近世の初頭、神聖ローマ帝国における一六世紀前半の宗教改革運動の波に乗り起こった「ドイツ農民戦争」(1524年～1525年間【※ 火器の発達による戦術の変化が引き起こした騎士の衰退期が背景で、多くの下級帝国騎士たちが、カトリック教会の理想的な世界秩序構想に基づいて規定された抑圧や収奪からの解放を目指した農民と同盟を結び、ルターを旗印に農奴制の廃止を求めて、封建領主としてのカトリック教会、またはカトリック派の領主に対して反乱を起こした】)に参加し、騎士としての武名を高めることが出来た。

展示されている二体の義手は、発条とラチェットで構成された仕掛けが特徴で、健全な手を用いて、その一体は手全体の開閉のみ、もう一体は個々の指関節それぞれの設定を変更することが可能となるといった利点があるため、単なる装飾用ではなく、日

常生活動作の様々な場面で実際に使用できるものとなっている。また、一六世紀フランスの軍医、アンブローズ・パレ (Ambroise Paré, 1510年～1590年) が *Traitant des moyens et artifices d'adiouster ce qui defect naturellement ou par accident* (1575年初版【※『先天的に欠如している、あるいは事故によって失った身体の欠損部位を補整する方法と機器を紹介する論文』)において、“*La main/bras de fer*” (「鉄手・鉄腕」)、あるいは“*La main savante*” (「義手」)と記されている鉄製の能動式義手の構築について最も詳細な記録を残したことから、医学史研究では「パレ式義手」とも称されている。

欧州各国の博物館が所蔵するコレクションにおいて、一五世紀末から一九世紀までの間に製造された凡そ四十体の能動式「鉄手・鉄腕」が残されているが、ドイツの大詩人、ゲーテが「ゲッツ」を題材にした史劇『鉄の手のゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』 (*Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand*, 1773年に初演、同時に初版) が盛んに上演されたり、広く読まれるようになってきたことで、フォン・ベルリヒンゲン家の居城であるヤクストハウゼン城に対しても人びとの関心が高まってきており、そこに残されていた鉄製の義手の存在も次第に知られるようになり、特に本博物館で展示されている「鉄手」は、一九世紀から二〇世紀に渡り、義肢装具士が設計した能動義手の構造形成・機構の組み立て方に強く影響を与えたといわれている。

近世の「鉄手・鉄腕」は、その製作技法を習得できた職人が少なく、さらにそれらの作製がとても手間のかかる作業で、庶民には手の届かない高価なものであったため、使用者は貴族や裕福な商人など一部の裕福な者のみに限られていた。一般の人びとも購入できる義肢の開発に力を入れ、義手や義足の大衆の普及を目指して、1812年に、旧プロイセン王国ベルリンの歯医者、ペーター・バリフ (Peter Baliff, 1775年～1831年)、または1836年に、同ベルリンの医療用精密道具造り女性職人、マルガレーテ・カロリーネ・アイヒラー (Margarethe Caroline Eichler, 1808/1809年～1843年) によって開発された、小さい

物を把持できるようにもとより開いている指を、健全な手を支持に使う必要なく肩や肘の動きのみで閉じることが可能であった能動義手の基本構造体、それらの内部の機械構造は「ゲッツの鉄手」より発想を得たことについて、彼らが残した記録からうかがえる。同じく、第一次世界大戦の間、ドイツの名医、エルンスト・フェルディナント・ザウアーブルッフ (Ernst Ferdinand Sauerbruch, 1875年～1951年) のもとで、「ザウアーブルッフ式義手・義腕 (Sauerbruch-Arm)」という、腕の欠損部に残された僅かな筋肉で動かすことのできる義手も「ゲッツの鉄手」に着想を得て発明されたものとされている。

欧州において義手の使用が民衆の間でも広まってきたのは、一九一〇年代の後半以降のことになるが、その大体は能動式のものではなく、作業別に特化し、自力で生計を立てるための仕事に使用することだけを目的に製作された、より安価な作業用義手が、近年に至るまでも一般的であった。ヤクストハウゼン城博物館で展示されている一六世紀の義手の歴史的意義については、義肢の発達史を表す能動式タイプの古い一例として貴重であるだけでなく、当時の史料に基づいてそれらの近現代の義肢学先駆者として評価の高いバリフ氏やアイヒラー氏、ザウアーブルッフ氏等に与えた影響が実証的に明らかにされてきたため、現段階の義肢テクノロジーへの発展、進化に直接繋がっているものでもあるといえる。

## VIII) 医学史や医療史、または疾病や〈障害〉の歴史に特化した専門図書館、史料館、コレクション等

- **Wellcome Collection** (ウェルカム・コレクション)【イギリスの大ロンドン市ユーストン街、ユーストン通り (Euston Road) 183番地、ウェルカムビル (Wellcome Building)】(<https://wellcomecollection.org/>)

「ウェルカム・コレクション」とは、一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて製薬事業で莫大な富を築くことができた薬剤師、大実業家のヘンリー・ソロモン・ウェルカム卿 (Sir Henry Solomon Wellcome, 1853年～1936年) によって収集された医学史・医療史に

特化した個人コレクションに由来するものである。

科学的医学の発展史のみならず、広く〈健康、さらに医と病の社会的や文化的、または歴史的次元〉 (“*the social, historical and cultural dimensions of health, medicine and disease*”) を主たる対象とし、ウェルカム氏の個人の関心から始まったコレクションが公開されるようになった理由については、国民への健康啓蒙の目的で健康の保持増進の重要性、あるいは疾病予防の大切さについての理解を深めるとともに、特に文化史や民俗学の視座に立った医学界以外の一般の人びとの疾病に対する認識や理解、対応の仕方の解明を目指す研究を促進しようとする動機からであったといわれている。

もとより医学の歴史的発展、薬剤・売薬の歴史に大いに興味を抱いていたウェルカム氏が集めたコレクションは、西洋のもののみならず、アラビアやアフリカ、インド、中央アジア、東洋、ポリネシア、北・南アメリカなど世界中の各文化圏からのものまで広範囲にわたり、その数は百万点以上に及び、現在そういったような「ウェルカム・コレクション」は、歴史的医薬品の他に、幅広く人類史上の医学的や医療的器具、さらに「病」と「医」に関係する美術作品、民芸作品、民間医療文化的工艺品、病者・〈障害者〉等日常生活用具が収蔵、展示されている歴史博物館、史料館であり、図書館も併設されている。

所蔵の文献史料は、世界五十以上の言語に執筆された約二万一千冊の医学や医療、民間療法などに関する写本、写本の他にも約七万冊の図書（一五世紀以前：六百冊以上；十六世紀：五千冊以上）、または三万五千点以上の筆記及び印刷のエフェメラ（手紙やチラシ、パンフレット等）、さらに二十五万点以上の十四世紀以来の絵画史料を数える。前述の通り所蔵品は文字史料だけでなく、絵画などの史料、大きく非文献史料も収集されており、文化人類学や社会人類学といった人文社会科学的な角度から価値が高いと認められる近世初頭から近代にかけて作成された世界各地からの健康と医療に関するあらゆる種類

のものが収蔵され、展示されている。

博物館の入場も図書館及び史料館の見学も無料で、さらに、健康と医療にまつわる歴史的・文化的背景や関連要素を読み解くための機能として (“*intended to form a documentary resource that reflects the cultural and historical contexts of health and medicine*”) 開発された、登録の必要なく無料で検索や閲覧、ダウンロードが可能なオンラインでの絵画史料コレクションがあり、現時点では約十万点の絵画史料がデジタル化されているが、未だアップロードされていない数十万点の史料も今後デジタル化される予定である。

常設展示は、「Medicine Man（医師・療法士）」と名付けられ、様々な時代や地域の医を生業とした人たちが使用していた医療・医術関連の道具や医書と、医業の実践そのもの、彼らの患者との接触や関係のあり方などを反映する美術作品が融合された展示となっている。

「ウェルカム・コレクション」は現在、ウェルカム氏の死後に医史研究の支援を目的に設立された公益信託団体の「ウェルカム・トラスト（The Wellcome Trust）」によって運営されている。

#### ・「**Images from the History of Medicine (IHM)**”

（『絵画史料から医学史・医療史を読み解く』コレクション）【※アメリカ合衆国国立医学図書館（United States National Library of Medicine, NLM）所蔵】（<https://www.nlm.nih.gov/hmd/ihm/index.html>）所蔵品は、ファインアートから民間美術の作品まで幅広く、油彩画や版画、写真やポスターなど、医学や医療の社会的かつ歴史的な側面を読み解いていくことができる一五世紀から二一世紀初頭にわたる合計七万点以上の絵画史料が収蔵されている。コレクションの主たるものは、特に中央ヨーロッパと米国の作品が多いものの、イスラム圏や東アジア圏など、その他の文化圏の絵画史料も少なからず蔵されている。

大要一覧表

表記内容の説明

【①：如何なる施設として位置づけられるのか？】

【②：主たる展示内容／収蔵品の全容】

【③：対象としている時代と地域】

【④：展示品／所蔵史料コレクションの規模】

「Disability History Museum（障害史博物館）」

- ① 〈障害史〉を専門とした歴史博物館
- ② 近現代の米国における〈障害〉という現象の捉え方、〈障害者〉の社会的や文化的扱われ方  
一九世紀からの〈障害者〉保護・養護施設及び〈障害児〉保育・教育の発展史、二〇世紀の障害者権利運動
- ③ 近現代の米国のみ
- ④ 約三千点

「Museum of disABILITY History（障害史博物館）」

- ① 〈障害史〉を専門とした歴史博物館
- ② 主に近現代の米国における〈障害者〉の社会的扱われ方、社会生活において直面した様々な問題、それらの問題を通して見えてきた社会的課題の歴史的経緯及び現状の実態上の諸課題等  
米国史上の〈障害〉と医療や教育、社会やメディア、権利擁護など
- ③ フォーカスが近現代の米国に置かれているものの、全人類史の主要な一部としても〈障害〉という現象が取り扱われており、欧州の中世と近世についての展示セクションもある
- ④ 詳細は公表されていない

「Langdon Down Museum of Learning Disability（ラングドン・ダウン学習障害博物館）」

- ① 〈障害史〉を専門とした歴史博物館
- ② 英国における一九世紀前半からの知的障害、発達障害や学習障害を有する子ども、特にダウン症児、さらに精神疾患を持つ子どもの保育・教育の発展史  
〈障害者〉等の生活改善の歴史的な経緯
- ③ 近現代の英国のみ
- ④ 詳細は公表されていない

「Bedlam Royal Hospital Archives and Museum（王立ベスレム病院史料館・博物館）」

- ① 〈精神医療史・医学史〉を専門とした歴史博物館・美術館
- ② 精神保健の歴史  
精神疾患を煩っている人びとに対する各種施策の歴史的な変遷、精神病患者向けの保療・福祉施設の発展史  
精神医学の近代化  
精神病患者が作成した美術作品
- ③ 一七世紀から現代に至るまでの英国のみ
- ④ 詳細は公表されていない

「Mental Health Museum（メンタルヘルス博物館）」

- ① 〈精神医療史・医学史〉を専門とした歴史博物館
- ② 近現代の英国における精神科医療の実践史や変遷史  
精神病患者や知的障害者等の「人道的な待遇（humane treatment）」への歴史的変遷が中心である
- ③ 近現代の英国のみ
- ④ 詳細は公表されていない

「Oregon State Hospital Museum of Mental Health（オレゴン州立病院 附属 メンタルヘルス博物館）」

- ① 〈精神医療史・医学史〉を専門とした歴史博物館
- ② 旧オレゴン州立精神病院（Oregon State Insane Asylum）における精神疾患の治療の歴史  
精神保健施設や精神医学の発展史
- ③ 二〇世紀の米国のみ
- ④ 約四千点

## 大要一覧表

表記内容の説明

【①：如何なる施設として位置づけられるのか？】

【②：主たる展示内容／収蔵品の全容】

【③：対象としている時代と地域】

【④：展示品／所蔵史料コレクションの規模】

### 「Museum Vrolik（アムステルダム大学学術医学センター附属フロリク博物館）」

- ① 〈病理学・奇形学〉を中心とした解剖標本博物館
- ② 奇形児や異形の者、身体の形態異常や形成不全など、あらゆる疾病や身心障害の症例を示す蠟模型や実物の人体・身体部位標本
- ③ 世界各地からの人体標本
- ④ 一万体以上

### 「Grodno Medical State University Museum of Malformations of the Human Body（フロドナ州立医科大学 附属 奇形学博物館）」

- ① 〈病理学・奇形学〉を中心とした解剖標本博物館
- ② 奇形児や異形の者、身体の形態異常や形成不全など、あらゆる疾病や身心障害の症例を示す実物の人体・身体部位標本
- ③ 近現代のベラルーシからの人体標本のみ
- ④ 約百体

### 「“Wax Museum”, Moulage Collection of the Andreas Syngros Hospital of Venereal & Dermatological Diseases（「蠟博物館」、アンドレアス・シングロス性感染症内科・皮膚科病院 附属 身体の病変部蠟模型・ムラージュコレクション）」

- ① 〈病理学・奇形学〉を中心とした解剖標本博物館
- ② 性感染症や皮膚病によって引き起こされた身体面に現れる症状を示すムラージュ
- ③ 二〇世紀のギリシャのみ
- ④ 千六百六十体以上のムラージュ

### 「Naturhistorisches Museum Wien: Pathologisch-Anatomisches Bundesmuseum im Narrenturm（ウィーン自然史博物館 附属 州立病理学・解剖学博物館 旧狂人の塔）」

- ① 〈精神医療史・医学史〉を専門とした歴史博物館、さらに〈病理学・奇形学〉についても学べる解剖標本博物館
- ② 近代的精神病院の誕生、または一八世紀末からの精神科医療の実践史や変遷史  
奇形児や異形の者、身体の形態異常や形成不全など、あらゆる疾病や身心障害の症例を示す人体・身体部位標本
- ③ 近世以来の精神科的知識と対応に関する文献史料、旧神聖ローマ帝国及び旧オーストリア・ハンガリー帝国からの人体標本等
- ④ 五万體以上

### 「Medicinsk Museion（医学博物館）」

- ① 〈医療史・医学史〉だけでなく、〈障害史〉や〈疾病の生活史、文化史〉をも専門とした歴史博物館
- ② 近代的医学及び公衆衛生の発展史  
史上に見える人間の疾病や身心障害との日常生活・社会生活  
一九世紀初頭からのデンマークにおける視覚障害史
- ③ 前近代から現代に至るまで、デンマークのみならず、比較的少ないが、世界各地からの事例も挙げられている
- ④ 十二万五千点以上

### 「Deutsches Hygiene-Museum（ドイツ衛生博物館）」

- ① 〈衛生思想・衛生学〉の歴史を中心とした博物館
- ② 史上の人体についての認識とその取り扱い、特に歴史の中での人間の身体にまつわる日常的な経験や体験等  
前近代からの「身体をめぐる知識（Körperwissen）」と「身体の管理（Körperpraktiken）」の歴史的経緯  
人類史上の健康づくりや疾病・身心障害の予防  
公衆衛生、または国民衛生教育や健康啓蒙の発展史
- ③ ドイツを中心に前近代から現代に至るまでの欧州諸国、西洋文化圏以外からの事例も挙げられている
- ④ 約六万八千点

大要一覧表

大要一覧表	
表記内容の説明	
【①：如何なる施設として位置づけられるのか？】	【②：主たる展示内容／収蔵品の全容】
【③：対象としている時代と地域】	【④：展示品／所蔵史料コレクションの規模】
「The Science Museum, London (ロンドン科学博物館)」	
① 科学博物館 ② 近世から現在に至るまでの人工補装具（プロテーゼ）の開発史 ③ 前近代から近現代に至るまでの欧州諸国 ④ 数十点の歴史的義肢等	
「Schlossmuseum Jagsthausen (ヤクストハウゼン城博物館)」	
① 城内歴史博物館 ② ドイツを中心に一六世紀からの義手の開発史 ③ 前近代から近現代に至るまでのドイツ、さらに欧州諸国 ④ 詳細は公表されていない	
「Wellcome Collection (ウェルカム・コレクション)」	
① 〈健康、疾病や身心障害の歴史〉に特化した専門図書館と史料館 ② 狭義の医学史以上に、広く健康、または疾病や身心障害の文化的かつ歴史的次元を反映するあらゆる種類の史料が集められたコレクションである ③ 国や文化圏、もしくは時代に制限されずに、世界史の視座から健康と疾病の文化的側面、それらの人類文明史上の諸相に関連した歴史的作品が収集対象となる ④ 数十万点の歴史的な作品（文字史料のみならず、絵画など非文献史料も収蔵されている【※世界五十以上の言語に執筆された約二万千冊の医学や医療、民間療法などに関する写本、写本の他にも約七万冊の図書（一五世紀以前：六百冊以上；十六世紀：五千冊以上）、または三万五千点以上の一八世紀以来の筆記及び印刷のエフェメラ（手紙やチラシ、パンフレット等）、さらに二十五万点以上の十四世紀以来の絵画史料】） 既に十万点の史料がデジタル化され、無料でオンライン史料館での検索や閲覧、ダウンロードが可能	
「“Images from the History of Medicine (IHM)”（『絵画史料から医学史・医療史を読み解く』コレクション）」	
① 〈医学史・医療史〉関連の絵画史料コレクション（デジタル史料館） ② ファインアートから民間美術の作品まで広く油彩画や版画、写真やポスターなど ③ 一五世紀から二一世紀初頭に至るまで 中央ヨーロッパと米国の作品が多いものの、イスラム圏や東アジア圏など世界各地からの絵画史料 ④ 七万点以上の絵画史料	

参考文献

Sandell, Richard; Delin, Annie; Dodd, Jocelyn; Gay, Jackie (2005) “Beggars, freaks and heroes? Museum collections and the hidden history of disability”. In: *Museum Management and Curatorship*, 20 (1), 5-19.

Sandell, Richard (2007) *Museums, Prejudice and the Reframing of Difference*. New York, London: Routledge.

Sandell, Richard; Dodd, Jocelyn; Garland-Thomson, Rosemarie [eds.] (2010) *Re-Presenting Disability: Activism and Agency in the Museum*. New York, London: Routledge.